

第2回 北九州市不登校等に対する総合的な検討に関する有識者会議
【会議要旨】

1 開催日時

令和2年2月3日（月） 18：30～20：30

2 開催場所

小倉北区役所 東棟6階 教育委員会会議室

3 出席構成員・ゲストスピーカー

構成員：8名（構成員定数：11名）

ゲストスピーカー：2名

4 議事

- (1) 不登校経験者・他地域からのヒアリング
- (2) 意見交換

5 会議経過

- (1) 不登校経験者・他地域からのヒアリング

座長 まず議題1「不登校経験者・他地域からのヒアリング」についてです。本日お2人の方に来ていただいております。

 最初に、今回ヒアリングを行う趣旨やお2人の簡単なお紹介を、事務局からお願いしたいと思います。

事務局 本日まず、「すてっぷ」の下川様にお話しいただきたいと思っております。その趣旨に関しては、実際ご自身が不登校を経験されて、今はひきこもりの方の支援をしているということで、ご自身のご経験と現在のお仕事の内容から、特に学校教育や学齢期の子どもに対して、どういうことをやらしてもらえばよかったかというようなお話しをいただきたくて、今回ゲストスピーカーとして呼びさせていただきました。

 次に藤崎様でございますが、現在開善塾教育相談研究所というところで、不登校の子どものご家庭訪問ですとか、キャンプを通じた支援をされております。長いこと文部科学省の関係の委員などもされておりますので、そういう観点でご自身のご経験と文科省の会議等に

参加をされてどういう変化がこれまであったかとか、そういうことをお話いただきたくて、ゲストスピーカーとしてお呼びさせていただきました。

北九州市の関係の方だけですと閉じた議論になってしまうかなということもありまして、今回ゲストスピーカーとしてお越しいただいております。以上です。

座長

ありがとうございました。

では最初に、下川様のほうからお願いをしたいと思います。

どうぞよろしくお願いいいたします。

下川氏

ご紹介していただきました下川といいます。

本日はよろしくお願いいいたします。

今回は、私自身の不登校の体験についてお話を聞かせていただけたらということでしたので来させていただきました。

僕はひきこもりもしていたので、結構ひきこもりのことと呼ばれることは多いのですが、不登校というのは初めてなので、上手く話せるかというところはあるのですが、よろしくお願いいいたします。

自分自身の不登校ですが、最初の始まりが、もう小学校1年生の入学当初から不登校というか、学校に対してすごい不安感を強く覚えていたので、行くことを嫌がっていたという記憶があります。

もともと新しい環境に入るとというのが苦手な方で、今までも新しいところに行くと結構強く不安を覚えるとかあったのですが、そういう性質的なものもあるのかなと思います。

先生になだめられながら、一応学校には行くのですが、月に数度は行けない日が小学校1年の時からありました。

自分自身、特にいじめられたとか嫌な目にあつたとか、そういう経験というのは全くなくて、学校に行ったらそこにいる友達と普通に遊ぶという感じですので、行けばなんとかなるといえるか、そんな感じに周りに思われていたのではないかなというところがあります。

ただ、行けないというときは、ものすごく親と揉めていました。大体朝起きて「学校に行ける、行けない」という揉め事が起こることがありました。

普通に行けるときもあるのですが、何かこう起きた時に行けないのです。「何か今日は行けないなあ」という感じです。低学年の頃

でしたら、親も抱きかかえてとか引っ張っていくとか、それも可能だったので、低学年の頃はそのようにされていたなと思います。そういうようなことが、小学校4年生ぐらいまでありました。だから行き渋りというか、学校に行かないときもあるけれど、この頃はまだ行くほうが多いですね。多分休みを全部合わせても1ヶ月いくかいかないぐらいの感じです。

ただ小学校4年の頃になると、学校に行くと結構楽しく友達とも遊んだり、休み時間や給食を食べ終わったら即校庭に出て遊ぶような感じだったのですが、家に帰るとものすごく何というか脱力感というか、親とか家族と全然コミュニケーションをとらないというか、もうしゃべるのも億劫だし、家族の声がすごく気に障るというか。だから笑い声が聞こえただけでも怒ったりするような、何か少し変わった感じにはなっていたかなと思います。

それまでは1ヶ月いくかいかないかぐらいの休みだったのですが、小学校5年の2学期のときに、何かこう本格的に学校に行けなくなりました。5年のときというのが、とても仲の良いクラスではあって、その中で僕も普通にみんなと遊んでいました。

ただ、4年までは大体友達と遊ぶというのは少人数、大体4、5人のグループで遊ぶというのが普通だったのですが、5年になると、付き合っていく人数がすごく増えて、クラスメイト全員というか、ある程度平等にというと変ですが、みんなとまんべんなく付き合っていました。

ただ、元々自分自身、人付き合いがそんなに得意ではないほうだと思うのですが、だからそういう大人数になると、みんなとまんべんなく付き合うために結構人に合わせるというか、過剰に合わせるようなところがあったりして、だんだん自分が何をしているのかという感じになったのかなと思います。

だから、2学期にふと今までと特に変わりなく「その日は学校に行けないな」となるとなると行けなかったのですが、その後がいつもと違って、何ですかね、「学校に絶対行かない」というような気分。その時は頑固に学校に行かないということを親に切望しました。

本当に様子が多分おかしかったのだらうと思います。父親はものすごく怖い人なのですが、僕の様子を見て、「学校に行かないで、家にいて休みなさい」というふうに言ってくれて、そのときものすごい安心感を覚えたという記憶があります。

それから本当に学校に行かなくなって、家の中で過ごしてしまし

た。家の中ではゲームをしたり、テレビを見たりしてしばらく過ごしていました。そのまま昼間1日ボーッと過ごしながら、たまに学校の先生とかクラスメイトが来てくれて、初めのうちは一緒にいれるというか一緒に遊んだりもできていたのですが、だんだんクラスメイトとか先生に会うのが何か嫌になりました。だから「もう呼ばないでくれ」、「クラスメイトが来ても、もう入れないでくれ」と親に頼みました。

それからはずっと1人で、家族以外とは接しないで自分だけで過ごしていました。1人の生活になって、リラックスする時間もできたのですが、やはり学校のことがすごく気になっていて、何か変な気の遣い方をしていました。

例えば、テレビゲームとか子どもの頃なので大好きだったので、時間はいっぱいあるのでずっとすればいいのですが、何か悪いなど思って、とりあえず学校の時間が終わるまではゲームをしないとかなんな自分ルールができたとか、あと、昼寝しないと起きておくとか、勉強も気になるので勉強とかもしたりしていました。

そういうふうにごしながら、5年の2学期から行っていないのですが、6年になったら、やはり学校に行かないといけないなど思って行ったりとかしてみるけど、やはり長続きせず学校に行かない生活に戻ったりとかしました。6年は修学旅行は行ったのですが、そこで終わったという感じです。

そのまま6年も終わって、中学に上がったとき、もう1回行ったりしたのですが、1学期行って、また行けなくなる。

中学2年に入ったら、2学期だと思うのですが体育祭まで出て、行けなくなる。

3年は、修学旅行には行こうとしたけど結局行けず、その手前の準備まで行って行けなくなるというのを繰り返していました。

だんだん1学期大丈夫だったのが、1ヶ月とか1週間とか行ける日にちが目減りしていきました。そういうこと関係なく、行かないといけないと思って、学生服を着て、校門の前までは行ったのですが、そこに行ったときに足がものすごく震えて入っていきませんでした。それから、もう完全に行けないと思いました。

そういう生活をしていましたが、途中、少年支援室のほうも、校長先生に案内をされて、何度か行かせていただきました。あれは全部イベントごとだったので、全部思い出に残っております。カヌーに乗ったりとかいろいろさせていただきましたが、自分自身の、人

と触れるのが少し難しいというところがあって、継続して参加することはできなかつたですね。

そのまま中学校自体は卒業という段になり、「高校に行くなら1つだけあるよ」と言われまして、「不登校の経験をしている子も受け入れている高校が、県外に1校あるのでそちらに行くか」と言われまして、一応県外ということもあり大いに不安はあったのですが、そちらに進学させていただくことになりました。

そこは全寮制ですので、実家を離れて寮に入りました。寮に入ったら、やはり同級生と一緒にの部屋で生活をしますので、その流れで学校に行くことはできました。だから1ヶ月間なのですが、毎日行っていました。遅刻することもないし、全部参加していました。ただ、体調がものすごく悪かったと思います。結構お腹を壊しやすいのですが、毎日お腹を壊していました。

1ヶ月間行きて、ゴールデンウィークになったので、北九州に帰ってまた学校に戻ったのですが、戻ってから2、3日して、急に「家に帰りたい」という気持ちが強くなりまして、寮を脱走しようとしてしまいました。「今日は学校に行けない」と言って、みんなが学校に行っている間に、荷物をまとめて帰ろうとしたら、様子を見に来た先生に見つかりまして、校長室に行ってお話をして「帰っていいよ」ということで帰りました。

その後、家で生活をして、校長先生とかが様子を見に来てくれたのですが、やはりもう戻ることはできないということで、そのまま退学をしました。

その後、一応大検を取るという話になりまして、予備校がちょうど小倉にできてそちらに入校したのですが、そこも1ヶ月ほど通ったあとにまた通えなくなりました。

これが僕の学校に関する不登校の遍歴になるかなと思います。

自分自身、ひきこもり地域支援センター「すてっぷ」で、相談を受ける立場になって、自分のことを振り返って、未だに原因は全然分からないところもあり、本当に合っているかどうか分からないのですが推測したりはします。

先ほども申したように、自分の性格、新しいことに対してすごく不安を覚えて、緊張が強くなってしまうというところもあります。あと、人との関係の中で、今も僕の中で課題かなと思うのですが、「他者の評価」というのを気にするところがあり、人の顔色を見ながら、人と付き合うというところが結構ある。これは先生とかもで

すが、同級生もその対象になります。だから友達に対しても、すごく嫌われないようにとか、孤立しないようにとか、そういったことにとっても緊張しながら気を付けながら生活をしていたのではないかと思います。

今も覚えているのですが、自分自身の授業風景というのを思い浮かべたら、ものすごく背中を真っ直ぐ伸ばして、結構ピシッと固まった感じで授業を受けていた感じでした。何かそうしないと、真面目に授業を受けないといけないし、そうでなければならぬみたいな感じで、ずっと緊張していたというところがあるかなと。

そういう感じなので、自分の知らないところで、どんどん疲れていったのかなと。人と付き合う上でも、楽しいところもあるのですが、緊張とか不安とか、そういうものもたくさんあって、自分のがびのびとしていたという感覚は全くなかったと思います。

なので、だんだんと人を避けるというか、人と会うとその人に合せてしまうので、よく疲れるというか、そういったところもあったかなと思います。

今もそういったところはあって、合わせたりとか結構するので、でもそういうのを自分で考えて、分かってきている部分で気を付けているというところはあるから、前ほど疲れたりはしないのですが。

小学生とか中学生の頃だと、やはりそういったことに対して、分からない疲れとかには、対処の仕方が不登校という形でしか出なかったのかなというふうに思ったりはしています。

座長 ありがとうございます。ご自分の経験をもとに、客観的な視点も踏まえたお話を頂戴いたしました。

下川様からお話しいただいた件に関して、ご質問等ございましたら、ぜひお願いしたいと思います。

構成員 私たちのために、ご自分の経験を話してくださってありがとうございます。

何度か下川さんのお話は伺いするのですが、会う度に丁寧に一つひとつしっかり考えて発言なさっていて、そのように周りに気を遣うとかそういったことが、小中学校のときはもつとなさっていて、その正体が分からなくて、不登校という形でその疲れが出てしまった、という最後の部分は、本当に今私たちが接している子どもさんの中にも通じるものがあるのではないかなと思いました。

感想に近いかもしれませんが、小学校5年生の2学期から行けなくなって、「もう行かない」と思ったあとでも、毎学年、修学旅行や体育祭や様々なタイミングを図って、一生懸命「登校」ということに向き合っていたのではないかなという気がしています。

その部分についてお尋ねしたいのですが、そんなに疲れて体調も悪くなって、お腹も壊すし、足も校門のところでガタガタ震えても、それでもなお「みんなが行っている学校に行きたい」というお気持ちがあったのかというところを、改めてお聞かせいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

下川氏 「学校に行きたい」というか「行かなければならない」というほうかなと思います。あとそれもあるのですが、やはり将来の不安とかも強いですし、「もし学校に行かなかったらどうしよう」というところはすごくいつも思っていたので、そういう不安から行こうかなというほうが、きっと強かったかなと思います。

学校に行かなかったときは、外に出てみんなと顔を合わせることができないというか、そういう気分だったのでほとんど家にいました。

そこは楽な部分もないことはないのですが、外に出てみんなと話したりとかもしたいという気持ちもあって、だからそのためには学校に行かないと、大手を振って外に出られないというところも少しあったかなと思います。なので、何度かチャレンジはしていたのかなと思います。

座長 ありがとうございます。他の構成員の方、いかがですか。

構成員 下川さんが、ひきこもり地域支援センター「すてっぷ」で、どんどんアウトリーチをされていたり、グループ活動に入っていたりも知っているので、ちょっと聞いてみたいと思うのが1点です。

昔の下川さんは今話していただいたと思うのですが、今、支援者の下川さんから見て、昔の下川さんにできる何か支援とか、こんな支援あったらよかったとか、逆にこういう支援が今後あると不登校の子たちはいいのかもしれないというものがあつたら、少し聞かせていただくとありがたいなと思いました。

下川氏 不登校の子どもさんは、僕もですが、学校に行かないことにすごく

罪悪感を覚えていたりとか、苦しんでいる部分もあったりとか、やはり普通に大多数の方がやれていることが、自分ができていないということに対して、すごくマイナスなイメージを持っているところがあると思うんです。

よくあるのが、関わってくる人が、どうしても「学校に行きなさい」とか「学校に行きましょう」とか、学校ありきで話しかけてくるが多かったかなと思います。

「元気になったね、学校に行けるね」みたいな感じで言われていましたが、その人と会って嬉しかったりして、元気になっているふうには見えるかもしれないけれど、そこで「学校」が出てくるとすごく「ああっ」という感じでちょっと嫌な気分になりました。

僕が不登校だったときに、関わってくれた大人の人が何名かいました。まずは近所のおばちゃん、とりあえず「元気？」と言って関わってくれるんです。全然「学校」とかは言わずに、お菓子をくれたりとか、そんなおばちゃんがありました。

あと、不登校から少し外れてしまうのですが、予備校の先生が、「別に学校に来ないでもいいよ」という感じで関わってくれました。「ギター弾けたらカッコいいよ」とか、「ギター弾かんね」とか、そんな感じで関わってくれる人がいて、そういう人とか、あと「少林寺拳法やらんね」とかいうおじちゃんもいました。

そういった学校を抜きにして関わってくれた大人というのは今もすごく覚えています。だからそういうふうに関わろうとしてくれた人たちがいることは、すごくありがたかったなと今は思っていますし、微妙に楽しみにしていたりとかもしました。学校、不登校とか、そういうものを抜きに関わってくれる大人がいてくれると、とてもうれしいなと思いますし、僕は今でも財産になっていると思っています。

座長 本当に貴重な体験をお話しいただきありがとうございました。
では続きまして、藤崎様にお願いしたいと思います。

藤崎氏 まず、下川さんありがとうございました。私が日常で会っている子供たちの将来が見えて嬉しくなるような気もしましたし、その一方で、これほど言葉でうまく不登校の自身の移り変わりを話してくださるのを聞いたのは、私も生まれて初めてでした。

今日は、うちの開善塾が民間でどう取り組んでいるかというお話

をさせていただければと思います。

やはり小学校などで、場面が変わると非常に不安になってしまうお子さんというのはいらっしゃるって、例えばもっと分かりやすく言えば、プールがあるとしたらその日は休みたいとか、給食がだめとか、そういうふうにはっきりしているお子さんだったらいいのですが、自分でもどうして不安なのか分からないというお子さんもいらっしゃるんですね。

実はうちの民間のようなところに相談に来られる親御さんの子どもの年齢が、やはり今まで中学校3年生が1番多かったんですね。このままだと高校に行けないからということで、小学校段階から他のところに相談をするというところまで決断をする親御さんは少ないんじゃないかと思います。やはりかわいいですし、体も小さいですし、守ってあげたいですから、家にいるということがものすごく多いと思います。印象的だったのは、親ともめるし、行けばなんとかかなっちゃうというのが分かったら、親も学校に行かせたいし、先生だって学校に来たら「何かこの子心配していたけどみんなと元気に遊んでいるじゃない」という感じで、それはもうどんどん引っ張るようになると思うんですね。

実は小学生ぐらいの不登校の相談で家庭訪問しましたら、とにかく私は遊びます。その子が好きなオセロだったりトランプだったりいろんなことをして遊ぶんですが、親の面談はかなり厳しくやるんですね。子どもの見えないところで、「毎日電話をください」と言います。なぜこんなことを言うかという、親が「明日学校どうする」と毎日聞いちゃうんですよ。これは実は聞いちゃいけないことなんです。なぜなら、学校は毎日行くところであって、「明日学校どうする」と言われたら、子どもはそのことに「明日どうしよう」、ドキドキって、じゃあ行かなければいけないから「行く」と言って翌日起きられなかったら、親が「行くって言ったじゃないの」ということによくなりますね。こんな小学校低学年くらいから朝行くかということで揉めると、せつかくの親子関係というのがやはり難しくなってしまうんです。

親というのは、どんなわがママを言っても、親子喧嘩をしても、子どもにとってもう親に「バカ」とか「ババア」とか言えるくらいの関係というのは、実はものすごく安心できる場所があるんですが、「明日どうする」で、親も落ち込みます。そこで毎日電話相談で何をするかという、「もう学校どうするって聞かないでください

ね」と言います。すごいしつこく言わないと、親はどうしても、「どうする」って言う。

修学旅行も「どうする」って親が聞いちゃうと、「修学旅行って行かなくていいんだ」ということになってしまうわけです。じゃあ「どうする」と聞くのは誰がいいかといったら、学校の先生が「おーい、体調どうかい」、例えば家庭訪問して「行くかい」、「どうしようっか」なんて聞いてくださることはいいわけですが、親が毎日「あんた明日どうするの、昨日もそう言っていて行かなかったじゃないの」と、これを繰り返すと子どもは疲れてしまうんですね。

ですから、「義務教育はなんのためにあるか」というと、やはりそのときに生活習慣を確立し、そして毎日嫌なこともあるかもしれないけれども、毎日決まった時間に、学校に登校して、そこで基礎体力もでき、決まったところに行くという習慣というのは、実はものすごい成り立ちというか、つくり上げるのは難しいわけなんですね。

ですから、多分下川さんがすごく苦勞されていたのは、結局習慣づいていない中で、たまに行ってがんばって、給食も食べて放課後までいたら、もう疲れ切ってしまうって「ああ」となっちゃうわけなんです。

ですから、うちはまず親のそういう対応の仕方も厳しく、毎日電話が来なかったら、叱っちゃうくらい、時々お母さんから、「もう電話を掛けるとまた藤崎さんに怒られるだろうな」と思うと電話が切りたくなります」と言われることもあったりはするんですけども、「今は子どもに負担をかけずに、子どもの生活習慣をつくっていきましようね」ということをやっていくわけですね。

ですから、例えば「制服を着て行ったら足がガタガタ震えた」とおっしゃっていましたが、やはり最初は失敗させないということを行いますので、例えば私はそういったときは、必ず一緒に伴走者として付いていく。あらかじめ担任の先生と相談をして、「今日は出席で、目の前でマルを付けて、もう帰しちゃいましょうか」と、先生とそこもちゃんと打ち合わせをして、「じゃあ今日は保健室まで入るか」とか、あるいは、「今日は午前中頑張ってきてね」と言ったり、担任の先生が1時間目終わったところで、「よく頑張った、もう今日は帰りなさい」、「無理するな」と言って帰す先生というのは、ものすごくよくその子どもの状況を分かってらっしゃる。「無理をするな、大丈夫？」とは聞かないで、はっきりと「無理をするな」と言って帰す。そういう教育相談的、指導的関わりを勉強され

た先生というのは、そこを徹底していくんです。

実は、お腹を壊す子もたくさんいまして、これはかわいそうなんです。自分でどうにもコントロールできないのは、皆さんよく分かってらして、大人ですら多分「ちょっと疲れたな」と思う時にお腹を壊す経験はたくさんの方がいらっしゃると思うのですが、トイレが重要なんですね。

うちでは、ある程度家庭訪問して元気になった子が、やはり1年も2年も休んで、すぐに学校に戻して長くいると厳しいわけです。

まず学校のうるささ、いつも静かなところにいた子どもが教室のうるさい中にと、思わず頭痛がしてくるとか、それからこういう姿勢で座るということを家でしている子はいないので、多分1時間姿勢を正して聞いているだけで、ある意味体力はもうそこで尽きているのだらうと思うんですね。

そういった中で、まずは合宿で強くしようとしていまして、30年以上前から群馬の廃校になった小学校を借りて、毎月の家庭訪問で、「じゃあ合宿行ってみる？」と聞いて来られるようになった子、3人から5人の小集団で行いますが、実は文科省から予算をいただいて最初にやったことはトイレの改造で、ウォシュレットを男子トイレ、女子トイレに付けまして、広いトイレにして、いつでもその子が「お腹痛い」となったら、快適なトイレに行けるようにしました。

それから、やはり「人と一緒にいると楽しいけれど緊張する、不安を感じる」とおっしゃってまして、それはもう本当にそのとおりなんです。では合宿で何をやるかということ、朝昼晩のご飯をつくってそれ以外のプログラムは、日帰り温泉に行く、一昔前は木造校舎でやっていたのでお風呂がなくて、ドラム缶風呂を焚いて入っていたのですが、女の子は喜んで入りますが、男の子は「こんなところに入ったら体が汚れる」と言って、あまり入りたがらなかったというのがあります。ただ、男の子たちに「薪を割って火を点けてくれる？」ということをやります。このドラム缶風呂の何がいかかって、無意識の失敗です。マッチを一箱だめにしても火が点かない時があるんですが、マッチが折れるって、そうたいして気にしないんですが、どんな子もはじめは少し「ええ、折れちゃった」と、びびったりするのですが、「こんなの何箱でも使っているから、ドラム缶風呂焚いてみよう」と言ったら、失敗を恐れなくなるんです。マッチをいっぱい擦ってもなかなか点かないものですから、無意識の

中でいかに失敗をさせるかが大切です。

とうとう雨漏りをしましたので、今は3階建ての鉄筋、トイレもウォシュレット付きに引っ越しました。その代わり日帰り温泉に行くのですが、実はいじめられた子は、みんなと一緒に入りたがらない。そういう場合は、15キロ離れていますが、別時間帯にその子だけを送って、誰もいないときに入ってもらったり、村人と入ってもらったりするのですが、だんだんその子も「藤崎さんに悪いから」と言って、みんなと入るようになるんですね。そして、やはり裸で入るということだけで、自己開示、もうオープンなんです。人に緊張するというよりは、温泉って気持ちいい、それからかなり汚くなっていますから、体がきれいになって爽快だとか。そんな中で、人と一緒にいることの緊張を、日常生活の中で取っていく。

先ほど「家庭訪問やクラスメイトが来て疲れちゃった」とおっしゃっていたのですが、やはりそういう時期はありまして、家庭訪問の中でも先生だけが行くことがいいときと、あるいは何人か友達を連れて家庭訪問するタイミングというのはあると思います。

家にいてリラックスできるけど学校が気になるとおっしゃっていましたが、その頃に例えばうちのような合宿に来て、朝昼晩一緒に料理をしたりする。特に効果があったのは、料理をして、から揚げが得意な子に「すごい」「おいしい」と仲間から褒められることもプラスになります。ちょうど日航機が落ちた上野村の隣の町で山奥ですから、一人暮らしのおじいさん、おばあさんにお弁当を届けるようなことをやるのですが、「こんなにおいしいお弁当は初めて、もう死んでもいいよ」とか言ってくれるんですね、そうすると子どもが、どんどん料理やるようになって、何も言わないのに「明日から学校行こうかな」とか言い出したりするんですね。

ですから、学級経営がうまくできているクラスほど、「この子を何とかしよう」と先生と子どもたちがワーツと押し掛けたときに、その子がやはりされるばかりだと苦しくなります。やはり人のために役に立つとか、そういう経験を積んでいけるようにしないと、「自分がお荷物になるんじゃないか」、「みんな自分に付き合ってくれているんじゃないか」と思ってしまう。「人の顔色が気になる」とおっしゃっていましたが、まさに私が会っている子どもたちも、とても気にしてしまいますので、その中で一緒にご飯をつくったりというようなこと。

また、下川さんのすごいところは、自分を律するということがで

きた子どもだったと思うんです。私が今関わっている子には1人もいません。どういうことかという、と、「学校がやっている時間にゲームしない、昼寝しない」なんて考えて実行している子どもに会ったことがないんです、もうゲーム漬けです。

親は、はじめ「まあ不登校もいいわ」と言うのですが、結局その次に直面するのは、1日12時間でもゲームをし続ける子どもたち。いろんな約束をしてもらいますが、「学校にいる間は、ゲームはしない約束しようね」と言って、守れた子は今まで1人も会っていないんですね。

では、うちの合宿に来る子たちがどうかという、持ち込みゲームOKなので、昔の合宿と違って「さあご飯をつくろうね」と言っても、誰も動かないでゲームをやっているんですね。もう仕方が無いから百歩譲って大人でつくって、「さあご飯だよ」と言っても、ゲームをしていて「今はお腹すいていないから」と言われちゃうんですよね。でも、それでも親から離れると、まず親の疲れが取れます。親も悩んでいるわけです。子どもたちも、こっちに来たらしい放題できるというので合宿にまずは来てくれるのですが、だんだん意識が変わってきます。一生懸命朝の5時から冬は炭をおこして部屋を温めたりとか、「皿下げようかな」とかいうふうに変ってきたりするんですね。

支援室とか、そういったものの存在の重要性というのも重々承知なのですが、そういったところに来られない子を、月に1回、1泊2日でも毎月、そういうキャンプを続けたら、大体1年が経つ頃には、かなりその子たちの社会性や「友達と会うことが面白い」、「一緒に過ごすことが楽しい」、「枕が変わっても寝られる」、「トイレもそんなに我慢しないでも行けるんだ」とか、そういうことができるのではないかなと思った次第です。これを、繰り返し、繰り返し、行っていくこと。私自身が会っている子どもたちには、中学校でも不登校になり、高校でも不登校になり、大学でも不登校になって、それこそ農業、田植えで、ひきこもりを復帰させるというような施設に入る子もいるのですが、そういった子たちも今は親となって、働いたりしてくれているんですね。

おもしろい例としては、これは富山県ですが、あんなに「絶対高校に行かない」と言っていた子が、農作業をサボるために高校に行って卒業して大学まで、そんな子もいます。ですから、下川さんのおられた時間を考えますと、もちろんすごいなと思うと同時に、例

えば学校の先生方に、きっと一生懸命だったとは思いますが、不登校の子どもたちの心理理解だとか、学校のことを言わないだとか、どんな内容の家庭訪問をどのタイミングでするかとか、そういう生徒指導教育相談の事例を、若いうちから触れていただけたら、もう少しうまく下川さんを学校に引っ張れたんじゃないかという思いと、あと、下川さんきっと勉強が嫌いではなかったと思うんですね。勉強をしたいという子は、助けやすいです。

ただ、全ての不登校の子どもが勉強が好きというわけではなく、それこそ発達障害ですとか学習障害などがある中で、「勉強だけはもうどうしても嫌だ」という子どもはいるわけです。ですから百人いたら百様の、そういう子どもの対応の仕方というものを追及していったときに、学校の先生方とそういう知見を共通理解できれば、今の不登校の数というのは簡単に3分の1減らせるのではないかと、完全に教室となるとちょっとレベルが違うかもしれませんが。

とにかく先生と繋がっていること、今日講演で話させていただいたのは、学校に来られない子どもの家を分校として考えて、家庭訪問をしていただけたら、親も安心できますし、また子どもにも負担にならないような家庭訪問というものをやっていただけると、だいぶ親子またはその家族の精神衛生上、関係がまずくなって親子が苦しまなくて済むかなと、そんなことを感じて聞かせていただきました。ありがとうございます。

座長 ありがとうございました。

本当にこれまでのレアな体験をなさったお話を聞かせていただきました。何かご質問とか感想とかございませんでしょうか。

今日用意していただいているレジュメについて、少しお願いしたいと思います。

藤崎氏 それでは続けさせていただきます。

まず3番目の「不登校を減らすために教育行政に求められること」ですが、お話しさせていただいたように、今働き方改革で、研修は負担感が増すばかりというような現状は聞いているのですが、うちで免許状更新講習をやっている、生徒指導を中心に発達障害的な対応から心理まで、子どもの自殺予防など30時間2泊3日でやるのですが、その中で野外炊事を先生方にもやっていただいて、みんなと一緒に火をおこしてカレーライスをつくるのですが、それが

楽しいですね。はじめは熱中症とか心配していたのですが、そうするとまず勉強する教員が仲良くなるんです。3分の1ぐらいは楽しみにしてくださるのですが、3分の2ぐらい、「教員免許更新なんかもう最悪」、「30時間一気に取れるからうちを選んだ」とはっきりおっしゃる方がいらっしゃるのですが、2泊3日やはり助け合おうんですね。

グループワークもありますし、試験の課題は「話し合っただけで記入してください」というグループ的な取組もさせていただいたりもするものですから、そうすると30時間終わったあと、宿泊も兼ねるので、全国北海道から九州までいらっしゃるのですが、もう顔が違って、「これから私帰ったら、夏休みなので家庭訪問してみます」、「何か楽しみにになりました」、「2学期が待ち遠しい」と言って、あれだけ研修を嫌がっていた先生方が変わられる。

また、講師陣は、やはり学校現場を経験されている方を主にして、内容的には学校に戻っての実践的な、今日プログラムをお配りできればよかったのですが、また後日お配りさせていただければと思います、そういった中で、北九州でもやはりそういう研修の中で、ぜひ不登校の子どもやいじめの対応に、やはりセンスというものが求められてきたり、あるいは同僚の先生方からもこの人だったら打ち明けることができるとかがあれば。

最近多いのは、生徒指導研修で教育委員会に呼ばれても、各先生の個人的なカウンセリングを頼まれたりしまして、その内容が「わが子の不登校で辞めようかと思っている」と、そういう先生方の精神衛生を図っていくことと同時に、これは埼玉県で教育委員時代に何度も何度も提案したのですが叶わなかったのですが、そういう相談のプロの教師、プロ中のプロというのをコーディネーターとして育てていただきたい。そういったコーディネーター養成講座というのを北九州市でやっていただいて、学校の校長先生たちに理解をしていただいて、将来の学校の先生方、若い先生を特に育てるという役割も担っていただきたい。

やはり家庭訪問しても若い先生トラブルを起こして帰ってきて、家庭訪問をさせなければよかったという事案がものすごく多いんですね。埼玉県で、いじめで不登校になって、第三者委員会を立ち上げる初期対応で、周りの先生がアドバイスをして、行っちゃいけないところに行ってしまったとか、「なんで行ったんだ」と言ったら「謝りたくて」と言って、揉めているのに宅急便の人のあとを付い

て鍵付のマンションをすり抜けて、行ってはいけない家庭に謝りに行ってしまった事案ですとか、「トイレに行きたい」と言った生徒を、「あと10分だろう」と言ってしまい、トイレに失敗して高校生で不登校になったりとか、いろいろな事例があるのですが、やはりスクールカウンセラーというよりは、先生方の中でそういう人を育てていただく、またそういった先生方が動きやすいような校内体制をつくるには、校長のリーダーシップが欠かせないと思うんですね。

それをしっかり発揮できる校長先生ですね、教科指導や全国学調も大事ですが、あまり学力こだわると、「塾の先生と学校の先生の違いはどこにあるか」というものすごく大事なテーマに行きついてしまうのではないかと思います。

学校というのは、やはりその子が「社会で生きていくための体験を積める学びの場」であるわけです。ですから、ぜひそういったことを提案したかったのと、それと同時に、先生方、保護者の対応力、面談力というのも上げていくような、そういったことはやはり学校現場だけでは難しいかなと、先生方が「なんだこんなに勉強することは楽しいんだ」とそうなると、自然とそういった実践を重ねていくと、先生方の授業も変わってきます。「つまらない研修は受けたくない」、そういった経験をされている方もたくさんいらっしゃると思うのですが、やはり授業でも効果はあるかなと。

あともう1つは、北九州市はものすごく自然が豊かで、私自身も平尾台とか北九州の自然というのは、本当に心惹かれるものがあるのですが、そこまで連れていくのが難しかったとしたら、学校に夜一泊するだけでも学校が怖い子にとっては、学校に対して愛着や帰属意識を生むことができます。ですから、地震対策、地震が起きたときに、どうやって過ごすかというのを君たちだけでちょっと体験してみても、豚汁はどのくらいのガスボンベで何人分、どのくらいの時間で作れるのだろうかとか、災害対策に絡めて、子どもたちに体験をさせるとか、そういうことをしていただくといいかなと。

実は埼玉でも、それこそ15年前、スーパーサマースクールというのを2週間、不登校の子どもを預かってやったときに企画参加したのですが、2週間ですから、本当に子どもたちは忍耐で、「もう帰りたい」と言って1人脱走した子がいて、すぐ警察が協力して連れて帰ってくれましたが、びっくりしたのが、2週間終わったあと、その子たち全員が2学期に学校復帰をしたんです。しかも8月31

日に子どもたちが「同窓会をやりたい」と言ってきて、大学生のボランティアたちとか、一部の先生が内緒でその子どもたちが集まるところが大宮のソニックシティというビルの前の広場だと分かっていたので、そこに行ったら、その子どもたちが「登校決起集会」と言ったんですね、もう誰が教えたんだらうって思いましたけれども。ああ、この子どもたちはやはり学校に戻りたいんだと、学校に本当に行かなければいけないと思えない子はいないわけで、それはつらいけれども、「やはり学校に行ったほうがいいな」、「学校に行かなきゃ」と思う。

「そんなに苦しいなら学校はもう辞めて、行きたいときに行くタイプのフリースクールのほうがいいんじゃないか」と言う方もいらっしゃいますが、やはり毎日行くということのほうが子どもは楽なんですね。最近「週に1回の登校でいい」という小学校の指導をしているような場面が少し多くて気になっているのですが、週に1回の小学生の子どもにとって、「1週間後」と言っただけでも、もう1週間暗く過ごさなければいけないわけです。でも、明日先生にマルだけ付けてもらって帰るとか、そういうような対応の仕方というのが、大事じゃないかなと思います。

最後に4番目、「チーム学校」。それはお互いにその子どもたちのことを考えて、仲間と助け合って子どもを見ていく、いろいろな目から見るといえるのはとても大事なのですが、課題としては、「あの子は顧問のほうがいいから顧問の先生がより関わったほうがいいんじゃないか」とか、あるいは「理科が好きだから理科の先生が」となるのですが、やはり担任の先生がその子どもの成長を見守るという日本の学校教育文化というのは、そんなに簡単に変わるものではなく、やはり担任が大事ではないか。

この担任の先生を中心として、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーという周りで、その先生の動きをサポートしたり、その先生が動けないときは家庭訪問したりというのは、もちろん手段としていいとは思いますが、担任の先生のもとに戻っていくことを大事にしていくことが、実は日本の学校の良さで、これからも守れる部分じゃないかと思います。

アメリカのティーチャーは、勉強を教えるだけで、何か問題があったら、やはりカウンセラーですよ。休んでいる生徒がいても、「この子今日はいないけど、きっと停学かスクールカウンセラーのところね」で終わるわけですよ。でも学校の担任の先生だったらそれは

ない。それなら、担任の軽減できる負担というのはどんどん軽減していったらよいと思いますが、子どもにやはり向き合っていくという面で柔軟さを持った対応、ずっとそれが続くわけではなく、本当に一時集中してその子に関わるという、「勝負の時」というのがあります。先生方が思っているよりは長くかかると思いますが、やはり不登校をきっかけにひきこもりが今150万人、働きたくても働けていないうちのどれぐらいが不登校の継続かは分かりませんが、やはり不登校が始発になっている、そういうひきこもり青少年の例は多いと思います。実際、私も今48歳の方とか相談を受けていますが、始発はそうなんですね

働き方改革に反しているように聞こえるかもしれませんが、やはり教育行政としては、その先生の負担軽減のために、授業を補充して行って、その分その担任が動きやすくするとか、そういったことのほうがよいのでは。外部の専門家を入れれば入れるほど、教師の指導力は下がるというのが、実は適応指導教室を開始するときもかなり国で議論されていたのですが、「でも先生の負担を考えたら入れよう」となって、それがうまく働いている学校と、ダメな学校との格差が激しいわけです。スクールカウンセラーの数を増やして、不登校が減るかというそれは非常に難しいんじゃないかと現場の人間としては思います。

最後に、不登校調査研究協力者会議に3年間参加しましたが、フリースクール会議と不登校会議の2つに分かれていまして、ときどき合同になるのですが、フリースクール会議のほうが、意見活発で団結力もものすごかったです。なぜかという、例えば先生の非常に冷たい一言で学校に行けなくなった事例とかそういったものが溜まりに溜まって、そういう学校に戻すよりも、フリースクールでのびのびとさせましょうと。だとしたら学校に国費から出ている1人当たり例えば75万円くらいをフリースクールのほうに予算付けしていただいて、フリースクールを新しい教育の場としてほしいということで、どうしてもフリースクール会議側のほうが、意思統一ができていますので、ものすごく会議でも意見が活発に行われるんですね。

ところが、不登校会議のほうは、意外と責められることが多くて、発達障害の子どもが、例えばある先生から「もう教育機会確保法で学校に行かなくてもいいという法律ができたのだから、そんなに学校嫌だったら来なくていいわよ」と言われた事例とか、そういう報

告がどんどん続いてしまいますと、どんどん不登校会議のメンバーの発言力というか、発言ができなくなっていく。ただ、四半世紀、25年ほどに渡って、不登校に関わってきた人間としては、小学校、中学校にずっと行けなくて、その後、その子に能力、才能があり、「この会社に来てほしい」と言ってせつかく就職しても、朝起きることができなかつたり、体力が足りなかつたり、重要な会議の前になるとすぐトイレに行ってしまうとプレゼンができなかつたとか、その子のチャンスが本当に失われていくことがあるんですね。

それこそ学校で教室をトイレの近くにして対応しているような学校もあるわけなんですね。文科省の去年12月の通達で、「学校復帰ではなく、社会的自立を」というふうに文言を改めることがありましたが、果たして、私の実感としては、学校というものをなくして、社会、本当にその子が人生にあたって自分の幸せな人生をつくりあげる社会的自立ができるのか。一部の子たちはできると思います。学校がなくても、例えば職人として生きていくとか、家業が好きで、家業を継いでいくとか、そういう子たちはよいのかもしれないが、やはり学校復帰、学校に通うことは大事ではないか。

最後に、今日浅川中学校、あいおい少年支援室を見せていただきまして、私は遠隔授業にもものすごく反対の立場だったんです、実は。そんなことしたら、ますます家から出て来なくなったりするのではないかと。でも見せていただいて、校長先生から、「個室で授業は見ているけれど、これで止まることなくここでどんどん慣れていって、そして教室に戻れるように」と。また、ゲーム依存だった子が、「ちょっと面白い授業が遠隔で受けられるよ」ということで、それで学校に行くようになって、ゲーム感覚で授業が受けられるとしたら、これはものすごく素晴らしいことで、いろんな方面で、私自身の生徒も今何人かこれなら引っ張れるかもと思ったくらいの試みでした。

どの学校でもそれができるとは正直思わないんですね。ですから拠点校、モデル校としていくつか実施して、「そこに行きたい」という子どもがいたら、通学区の柔軟な対応をして、そこに通って、強くなったら原籍校に戻るみたいな、そんな対応も北九州市ではできないのではないかと。

あいおい少年支援室のほうも、施設的にもバブル期で非常に恵まれたところがあったのですが、支援室長さんが「親御さんに、ここに来て勉強ができるとか、そういったように思わないでほしいと

はっきり言うんです。ここでは、社会性、コミュニケーション能力というのを高めるんです」と、ものすごく大事だなと思うのは、学校に来られなくて罪悪感をもっている子どもたちに、「勉強も何もかもがんばれ」というのは非常に難しく、むしろ私自身も「勉強しようね」と言わないんですね。合宿で朝昼晩つくって夜はランプや人生ゲームをやったりして思いっきり遊ばせるんですが、そのときにゲラゲラ笑ったら、ああ、よかったなど。

ところが、だんだん元気になってくると、その人生ゲームが終わって就寝時間を一応11時くらいにしているのですが、そのあと1人の子が勉強し始めたら、他の子までその部屋に固まって漢字を始めたりして、多分子どもは勉強はしなきゃというのが分かっていると思います。ですから、仲間と一緒にいる、そして、学校の先生のもとに行くのが何か楽しいんだとか面白いんだというような経験を重ねていくという支援室のあり方で、それこそ学校の適応指導教室。ときどき名前が固くて、「適応指導なんて、子どもたちにとってものすごく嫌な表現だ」とおっしゃる方もいて、それは分からないでもないですね。ですから、そういう名前を、機能の役割はやはり適応指導だと思うのですが、その名称を変えたり、うちも合宿という怖がって来ない子もいますので、そこら辺は合宿と使わないで「フランスパンを焼いてみないか、教えてあげるからおいで」とかですね、いろいろとその子に合わせた誘い文句を使ったりしています。

すみません。ただ、今日の午前中見せていただいたものが自分自身目からうろこでした。やはり子どもの幸せは、その親とおじいちゃんおばあちゃん全ての家族の幸せだと思います。ですから、北九州市、政令指定都市で、経済的にも困難なお子さんがたくさんいるだろうとは思いますが、「これは」というモデル的な取組を何箇所もつくっていただいて、「不公平」という声が挙がるかもしれませんが、全体を上げるというのはものすごく難しいのではないかと。ですからモデル校、拠点校をつくって、いろいろこんなことをやっているというのを全国に発信していただきたい。ちなみに、今の私の知識は古いのかもしれませんが、遠隔授業は多分埼玉県でもまだで、そういった取組をされているのが、非常に羨ましく思いました。

ちなみにスーパーサマースクールは今やってないんです。本音を言いますと、やはりいいものは続けていただきたいし、それこそ「そういったことにお金を使っていたきたい」というふうに思いまし

た。すみません長くなりました。

座長

ありがとうございました。

本当に様々なご意見、ご示唆をいただいたと思います。

では続きまして、議題の2、意見交換でございます。

まずは議論を進めるにあたり、前回の会議でのご意見等を踏まえて、村上構成委員と事務局からの追加の資料があるということでございます。

また、前回ご欠席されております、緒方構成員及び原賀構成員に事前にヒアリングをさせていただいた内容のまとめや、検討に資するための論点を整理しておりますので、まとめて説明をお願いしたいと思います。

まずは、村上構成委員より追加資料についてのご説明をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

村上構成員 子ども・若者応援センターYELLの村上と申します。よろしくお願い致します。

いくつか資料を提示させていただいておりますが、時間の都合上かなり割愛しながら進めていきたいと思っております。

まずは、一番はじめの資料ですが、北九州市の中学生がその後どういった進路を辿ったかという資料を提示させていただいております。その中に、100名ぐらいだと思うのですが、進路が未決定の状態卒業されているという方がいらっしゃるかと思います。

それから、資料2に関しては、「子ども・若者応援センターYELL」がどんな活動をしているかというのを添付させていただいております。実際に若者たち、中学校が終わってから、高校中退後、いろんな方がYELLに訪ねてくるのですが、そういったときに今、様々な体験活動をさせていただいております。藤崎様が言われたような様々な体験を、北九州市では今、YELLがそれを行っているというような形になっております。15歳の義務教育までという枠の中では、なかなか難しいかもしれませんが、その15歳以降の義務教育が終わったあとのところを、青少年、部局のほうがいろんな体験をとおして若者たちを成長させていって、社会的自立というようなものを目指して、教育ではないですが、いろいろな体験を積んでいただけるというような資料を添付させていただいております。

それから、これは高知県の事例ですが、行政と地域にあるサポー

トステーションが提携をして行っているものです。中学校卒業後進路未決定、それから高校中退後進路未決定の方々ですね、そういった方々の支援をするために、行政とサポートステーションが協定書を作りまして、個人情報をお渡しして、義務教育でないところの部署が、その子たちを支援していくためにどうしていくのか組織がございまして、それを添付させていただいております。

青少年のほうとしての意見ですが、義務教育という観点からすると、うちは出口になるのかなと思います。高校だったり就職だったり、様々な支援の先がありますが、進路未決定の方々、もしくは高校に進んだけれどもドロップアウトした方々に関しては、YELL やすてっぷ、若者サポートステーションというようなところが、バトンを引き継いで若者たちの支援をしていくところかなと思っております。

この資料を提供させていただいたのは、前回の議論の中で、「では出口はどういうところになるのだろう」、今回の論点の中にもありますように、「義務教育段階の支援から卒業後の支援につなげる」として留意すべきことはあるのか」という論点を出していただいているところもありますが、その一助というか、1つの視点として、見ていただけるといいのかなと思って、この資料を提出させていただいております。以上です。

座長 ありがとうございます。追加の資料の説明でございました。
またご意見がありましたら、お願いしたいと思います。
続きまして、事務局からの説明をお願いいたします。

根橋計画調整担当課長より説明【資料3】【資料4】

座長 ありがとうございます。
まず意見交換を始めるにあたり、配布されている資料及び説明に関してのご質問がありましたら、お受けしたいと思います。
オブザーバーとして参加されている、藤崎様、下川様にもぜひ遠慮なくご発言いただきたいと思います。
皆さまよろしいでしょうか。
では特に質問がなければ、次にいきたいと思っております。
資料4「北九州市における不登校対策を進めるための論点(案)」について説明がありました。この論点につきまして、ご意見があり

ましたらお願いします。

説明で少しありましたように、3ページの5番目で、「今出ているデータ以外に何か必要なものがあるか」や、「こういったものがあったらいいのではないか」などありましたら、まず議論といいですか、発言いただきたいと思います。

また、ここに載っていない部分で新たに何かご意見がありましたら、出していただければと思います。何かございますか。

構成員 藤崎先生に質問してもよろしいでしょうか。

座長 何かございましたらどうぞお願いします。

構成員 資料4「2. 小中学校に関する事項」の中にもありますが、別室登校等、学校における多様な受け入れ体制について、先ほどのお話にもありましたように、なかなか教室で6時間7時間の授業を受けるのは難しい場合に、少し行ってみるとか、プリントを先生に提出しに行くとか、少しそこで交流して帰るとか、給食だけ食べて帰るとか、そういったことをするとき、別室というものは非常に有効ではないかというふうに私自身は思っていて、それぞれ学校のご事情がいろいろあるようなのですが、別室ができたらいいなと思っているところです。

その具体的な別室のあり方についてということではなくて、先生ご自身、先生が実際にしてこられて、別室登校というものに対してはどういうふうにお考えなのかぜひお聞かせいただきたいと思います。

座長 ありがとうございます。

よろしければぜひお願いしたいと思います。

藤崎氏 別室登校について、実は昔は、別室登校させてしまうと教室に戻しにくいというのが率直な実感だったんです。いきなり教室に入れてしまったほうが、子どもも楽そうだったんです。というのは、「踊り場についたら、ちょっと疲れてもう上に行きたくなくなっちゃう」というような側面があったのです。ただ、最近はそういうことはもうあまり考えなくなりました。

別室でうまくいっている事例を見ますと、学校全体、全ての先生

が、その別室登校の子たちに関わるんですね。例えば、山形県酒田市の中学校の中には、別室登校用の時間割があって、これは先生方に頭が下がるのですが、この学校は空き時間がなしなんですね。空き時間に、この教室に行って何か作業をしながら子どもたちと過ごすという大前提にして、全ての教員が別室登校の子どもと関わる時間を最低でも週に1時間もつ、というような校内体制を作ったんです。

そこに行きましたら、驚いたことがあって、別室が何箇所かあるんです。この学年の女の子グループは他の学年と上手くいかないからということで、いろんな空き教室に点在しているのですが、休み時間になりましたら生徒は来る、先生は来る、とにかく人の出入りがすごいんですね。最初から人に会いたくないという子どもの場合は個室も用意していますが、なんとなく人が動く学校にしているのだと。それから特別支援学級の先生も、通常学級の授業に行ったり。悪い例では、特別支援学級がある学校で、1つの校舎の中に2つの学校があるみたいに分かれてしまっているような学校があるわけです。普通の学校と特別支援学校が施設の中にあるみたいに。

ところがその学校は、先生たちの協力を得て、弾力的にやっているんで、非常にいろんな教室に人が出入りする。給食も、今日は一緒に食べたいという子どもたちが給食を持ってきたりとか、ものすごい人の流れがありました。

そこに至るまでいろいろ大変だったみたいなんですけど、中学校ですが、授業改革をして、どの授業でも子ども同士がペア2人、それから次に4人というふうにして、話す時間を全ての教科の授業でやる。先生たちもかなり苦労されたみたいですが、1時間の中に必ず子どもたちがおしゃべりをする、おしゃべりというレベルが、と思われるかもしれませんが、授業中に言葉を発するということが、やはり子どもたちの積極性を促すみたいで、実は全国学調が市で一番ビリだったのですが、そういうふうに変えて、人の流れをよくしてから、今市で一番点数が上がったと、特に何か対策をしているわけでもなく、それこそ教頭先生や校長先生までも授業をやったり、別室の指導に入っている。ただ、校長先生は「やはり自分は校長室で、個人的な面談をやるほうがいいから、あまり動かないようにしている」とおっしゃっていましたが、そんな例があります。

構成員

ありがとうございました。

座長 ありがとうございます。その他ございませんか。

藤崎氏 よろしいでしょうか。

座長 はい、お願いいたします。

藤崎氏 私が知っている事例として、「3. 小中学校以外の機関に関する事項」について。

様々なフリースクールがありますが、国の会議でもうご存知の方はいらっしゃるかもしれませんが、京都にフリースクールがありまして、すぐ近くの中学校とタイアップして、理科の授業はフリースクールではなくその中学校に行き、その中学校の理科の先生から授業を受けるということを実践しているんですね。

これは、1つは理科というのは日常生活の中でも洗剤を混ぜたら事故に繋がりがねないとか、あるいはいろいろなビーカーの扱いだとか、そういったものは理科室でなければできないので、また、中学校で実験をしてもらうことによって、その子たちの高校進学への意欲が高まるそうなんです。

しかもそのフリースクールの理念として、学校でいじめられたりした子に関しても、学校とかそういうのを恨んだりしても前に進まない、自分の将来の人生を切り拓くためにフリースクールに行き、次を考えよう、社会を恨まないということをととても大事にしているとおっしゃっていました。

なによりもその理科の授業、中学校の先生たちの専門的な授業を受けられているという実践は、非常に重要ではないかなと思ひまして、フリースクールとの連携は、そういった意味でも具体的に行えるといいのではないかなというような事例です。

座長 ありがとうございます。
 そういった方法も、随分考えられているということですね。
 他にございませんか。

構成員 本日は、一応フリースクールの者として出席させていただいていますが、本校は、実はメインは通信制の高等学校でして、高校生もフリースクールと一緒に通ってきているという状況になります。

今のフリースクールと中学校とのタイアップですね、理科の授業を一緒にするというものは、本当に同じように私もいいなと思いつながら聞かせていただきまして、やはりフリースクールに通ってきている小学生と中学生がいるのですが、やはり異年齢、いろんな学年の生徒と関わることというのが高校生にとっても、とてもよい影響を与えていまして、実際に一緒に体育とか、今度一緒にスケートに行くのですが、理科の実験では、この間バスボム、お風呂に入れたら泡がシュワシュワ出てくるようなものを一緒に作ったりとか、1つのキャンパスの中でやっています。

やはり高校生にとっても年下の小学校6年生、5年生がいるので、自分の弟妹のようにとてもかわいがってくれますし、小中学生のフリースクールの生徒たちも年上のお兄さんお姉さんにちょっと緊張しながらも、やはり最初はうまくはいかなかったのですが、そういう関わりの中でよい雰囲気が出てきているというのがございます。

なので、今はうちのキャンパスの中で完結していることですが、もっと外に出て、いろんな機関とかいろんな学校と連携ができれば、私たちもとても勉強になるといいますか、また発展的にフリースクールが活用できるのかなとも思います。

そのようなことも少し思いながら、聞かせていただきました。ありがとうございます。

座長 ありがとうございます。
それでは他に何かございますか。

構成員 私自身が精神科医なのですが、残念ながら子どもの診療というのは全く行っていませんので、単純に精神科医の立場として、お話をさせていただくと、今皆さんのお話を聞きながら、私自身が思ったのは、やはり子どもさんの問題だけではなく、やはりそれを抱えている親御さんの問題、こころの問題というのも大きいと思いますので、子どもだけを見るのではなく、家族全体を見ていかないといけないという感じはもちました。

では家族だけで見ればいいのかといたら、確かに藤崎先生もおっしゃったとおり、やはり学校の先生たちの協力なくしてやっていけないと思うのですが、学校の先生たちの負担も大きくなってしまつては全てが総崩れになってしまうと思います。

ではどこにどうすればいいのかとなると、やはりこれは教育委員

会も含めて、社会全体で考えていかないといけない問題だろうし、行政中心、もしくは国、大きな単位で見えていきながら、やはり濃やかな方法をいろんなパターンを想像しながら、基本は学校に行くことだろうと、私は正直思っています。

やはり学校でいろんな人間関係を学び、友達関係をつくり、そして、それが社会に出て行くときに、我々の社会生活の基盤となっていると思います。

ただ、病気だったりとか、先ほど言われたようにコミュニケーションがなかなかとれなかったり、不安が強い、いろんな事情があって行けない子どもさんたちがたくさんいるのは事実ですので、その子たちに合った環境づくりというのも、やはり考えていかないといけないと思ったときに、やはりよく今言われるように、多角的な目で見ていかないと、学校だけの問題だとか、先生だけの問題だとか言っていては、いつまで経っても解決しないのではないのかなというのが私の印象です。以上です。

座長

ありがとうございました。

まさしくそうだろうと思います。4番目の「家庭への支援」のところでもありますが、家族全体ということだけではなく、社会全体というところですね。その方法論をどうしていくか、ご当地のいろいろなやり方とか、その本人に合う合わないとか、いろいろあるだろうと思いますので、そういうところを工夫していくことになるのかなと思います。

他に論点の部分に関しまして、何かご意見ございませんか。

藤崎氏

今のご意見について、私も精神疾患を持たれる親御さんの子どもの家庭訪問に関してはとても難しく、正直いろいろな失敗も重ねていて、「私に追い詰められた」と言われた事例もあつたりしました。先生がおっしゃったことを聞いて思ったことが、家庭への支援で、実は親御さんのカウンセリング、厳しい指導だけではなく、自分がどんなに苦しい子ども時代を育って虐待されたとか、そういう親御さんの話を聞くカウンセリングも非常に重要だったりします。ただ、相談機関が土曜日はやっても、日曜日は開いていないというところが多い。埼玉でも例えば保健センターが、ひきこもりとかいろいろ相談を受けているのですが、素晴らしい建物で駅からもとても近いのですが、土日はやはりやっていないんですね。本当は家庭

訪問しても、土曜日や日曜日のほうが子どもに会いやすかったり、親も何となくゆったりしていたり、あるいは経済的に仕事を休みたくなかないという親御さんのために、土日あるいは平日でも夜間対応とか、これは人を増やすという人員体制が非常に大きくなるかとは思いますが、そういったときに、特に精神科医の方々のアドバイスを受けられるということが重要です。学校現場も、例えば児童精神科医とお話ができる機会なんて、診療が忙し過ぎてそんなチャンスも減多にないという実状もあつたりします。ですから、行政として1番困っている人たちに対応できる、相談ができる場所、土日対応というものを、ぜひ、お金はかかるかもしれませんが、そのときに助けられたらどれほど親も楽になるかということをおもいました。

座長

貴重なご意見ありがとうございました。

相談を受ける体制整備、そういったところもやはり出てくるのかなと思いましたが。新たな論点だろうと思えます。

他にございませんか。

今一度、この論点の案をご覧いただきたいと思えます。

1つ目が「児童生徒の状態に応じた支援の在り方」、2つ目が「小中学校に関する事項」、そして3つ目が「小中学校以外の機関に関する事項」、4つ目は「家庭への支援」、5つ目は「検討を進めるにあたり集めるべきデータ」とあります。

論点整理でこのようにカテゴライズしてありますが、これについて何かお気づきになることとか、こういったものを増やしたほうがよいのではなど、ご意見ございませんか。今一度お目をお通しいただきたいと思えます。

構成員

4番目の「家庭への支援」のところでお尋ねしたいと思えます。

今日お話しいただいたお2人の方々からも、家族が子どもに対して学校行くということを一生懸命に言うあまりに、子どもとの関係が悪くなったり、また子どもが追い詰められたりとか苦しんで、また保護者が学校に行かせたいがための言葉が逆に子どもを学校から遠ざけてしまう、そういうお話もありまして、この家庭への支援というのは、とても重要だと私も思っています。

前回の資料4の55ページに、不登校の子どもを持つ保護者の集いを子ども家庭局でなさっているようですが、これについてその状況ですとか、参加者の声等お聞かせいただければと思えます。

よろしく申し上げます。

座長 可能でしょうか、事務局ぜひお願いします。

事務局 年3回ほど、保護者の集いをやっているところですが、本年度は、第1回が豪雨のため中止となりまして、今1回行ったところです。
やはり講話として、いろいろな知識を深める前半部分と、それから小グループでのディスカッションする保護者の集いという形で、2部構成でやっているのですが、その中で、それぞれの体験談をお話しいただく、それからお互いが同じ悩みを持っているというところで、次のステップにどうすればよいだろうかとか、そういった様々な悩みを出されることで、次の会にもまた参加しようと、次につながります。だから復帰というところまでは、まだ十分な統計はとれていないのですが、そういった会をすることで、保護者が安心感を持って過ごせるという点はあるのかなと考えているところです。

座長 よろしいでしょうか。

構成員 ありがとうございます。

座長 他にご意見、ご質問はよろしいでしょうか。

構成員 論点のところが非常に整理されていて、まさにこの通りかとは思いますが、例えば「小中学校に関する事項」で他の機関が、小中学校に何を求めるのか、小中学校が逆に他の機関に対して何を求めているのかということ、より具体的に詰めていくと、中学校のやるべき内容だとか、関係機関とつなぐときにどの辺からつないでいけばよいのかとかいうのが分かりやすくなるのではないかなと。
例えば、今本校にいる生徒で、星槎学園と関係を持っている生徒がいるのですが、どうしても学校関係やフリースクールでも解決できない医療機関との連携だとか、そうなってきたときに、中学生を預かってもらえる、または入院させていただける機関が少ないとか、困り感がある、北九州市にもっとこの辺が多くあってほしいとか、そういった要望だけ挙げていってもかなりの整理ができるのではないかと思います。

例えば、5番目の「検討を進めるにあたり集めるべきデータ」で、

全く自分の感覚で統計をとっているわけではないのですが、例えば自分たちが小学生、中学生の頃の不登校の数は、明らかに今よりも少なかったのではないだろうか。なぜその時代は少なく、今多くなってきているのかというのは、やはり原因があるのではないかと。

例えば、人間関係を構築するという基本的なことを覚えていくときに、いつの時代からそれがなされてきたかという、やはりコミュニティの違いというか、自分たちが小さかった頃には、縦割りの年齢別の集団があって、その中で、遊びの中でルールを覚えていて人間関係を構築していくとか、そういったことを考えていくと、なぜ少なかった時代からこう増えてきた時代が変わってきたのかというデータもあるのではないかと。

就学前の人間関係を構築するところを意識的に模索していくというのも1つかなとか、その辺はデータがはっきりしないので感覚でしかものが言えないのですが、それぞれの論点について違う立場の人から見ての要望だとか、こういうことがあってほしいというのが分かると、なおさら学校は学校としての動きが作りやすいかなどという気がしました。

座長 ありがとうございました。

そうだろうと思いますし、第1回の意見が反映されているというところだと思います。

他にございませんか。

藤崎氏 「小中学校以外の機会に関する事項」で、適応指導教室を運用していく際に留意すべき点があるかというところがあります。

実は滋賀県の不登校会議に、私も副座長を務めさせていただいたのですが、適応指導教室をどのようにやっていけば、学校に戻しやすくなるかということで、1つの町が手を挙げてくれました。なんと単純にやったことが、適応指導教室の相談員の勤務を、午前は適応指導教室を開いて勤務したその指導員、相談員を、午後にそのままその中学校、小学校で勤務してもらおうというふうに予算を付けたんです。そうしたら、町に1校ずつしかないという小さな町ではあったのですが、なんと子どもたちが結局午後その相談員の先生が学校にいますので、午前の適応指導教室が終わると、集団で自転車で学校に向かうというふうになりまして、先生はそれを車で追い抜いていくと、「はい、待っていました」と。まちの中で勤務体制を変

えただけで、子どもたちを学校にも足を運ばせたというのは、思ったより難しく考え過ぎないで、それぞれのまちに合った、地域にあった人の雇い方でこんなに子どもの流れが変わるんだという、そういう研究結果が1年後に出たんですね。ですから、それぞれの適応指導教室の在り方というのは、その人員の配置、あるいはその相談員の人間的魅力、この相談員が学校の先生方ともすごく仲が良くて、その連携はうまくいったというふうに聞いています。

あと、先ほどデータのお話がありましたが、本当にデータやいろんな意見を聞いていくということはものすごく大事だと思っていて、今思い出したことが、埼玉でも、最近の中1ギャップではなく小1ギャップの問題で、例えば保育園から上がったお子さんが小1の担任の先生に、「もう少し字を書けるようにしてこのクラスに来てもらわないと、授業についていけない」と言われて、親が悩んで不登校になった事案がありまして、実は幼稚園から上がる子と、自然の中でずっと毎日歩いているような保育園から上がる子の小学校1年生の授業が、非常に難しくなっているというようなこともありまして、そういった連携、どういったことがあれば小学校が対応すればよいのか、ちょっと聞き取りという形にはなりますが、数字的なデータというよりは、いろいろ現場で起こっている小学校の先生方の悩み、それから幼稚園、保育園から見た小学校というものも、非常にこれから先は重要なのではないかなと思いました。

座長

ありがとうございました。たくさんのご意見を頂戴いたしました。

整理していくには、まだまだ時間がかかるかもしれませんが、たくさんのご意見を入れていただいた上で、少しずつ論点整理をして、事務局に検討を進めていただきたいと思います。

ご意見等まだ出てくるかなと思いますが、後ほど説明があると思いますが、メールやファックス等で送れるシステムになっています。ご意見をぜひお寄せいただきたいと思いますので、ご協力のほど、お願いいたします。

では最後でございますが、教育長のほうから本日の構成員の発言等に関しまして、感想等をいただければと思います。

どうぞよろしくお願いたします。

教育長

皆様、貴重なご意見ありがとうございました。

特にゲストスピーカーとして語っていただきました下川様、そし

て藤崎様、お2人には本当に心より感謝しております。

例えば下川さんがおっしゃいました、「学校以外のところで関わってくれる大人がいたことがとても助かった」という部分と、藤崎さんのおっしゃった、「やはりベースは学校に戻すということも大切だ」という発言、この一見ちょっと相反するような気もしたのですが、やはりそれぞれ一人一人、状況も年を重ねるに従って変わってくるのだなと、1人の子どもさんに関する部分でも、状況に応じて対応を変えないといけないのだなというところと、あとは本当に原因がいろいろあるところで、対応するというのは非常に難しいんだなというのを実感したところでございます。

不登校対策を進めるための論点でございますが、別室登校の話、またフリースクールとの連携、そして最後にございました、いわゆる小1ギャップ、幼保連携、幼保小連携というような問題、あるいはまた先ほどデータでご説明いたしました、やはり小学校から中学に上がった段階で、一気に数字が増えている不登校の問題というのは、やはり中1ギャップが大きいのかなと感じたところでございます。

いずれにしても、今日いただいた意見を参考とさせていただきます、それこそ校長先生がおっしゃられました、学校での対応、そしてまた学校だけではない教育委員会としての対応、そして行政全体としての対応、何ができるかといったところが、今からもっと具体的な対策として詰めていきたいと考えているところでございます。

本日は本当にたくさんのご意見ありがとうございました。勉強させていただきたいと思っております。ありがとうございます。

座長 ありがとうございました。

では、最後でございますが、今後のスケジュールにつきまして、事務局から説明をお願いいたします。

根橋課長 資料5をご覧ください。

第3回の会議に関しましては、年度明け、4月中旬頃を予定しております。

最終的には8月中旬頃に方向性をまとめていきたいと考えているところでございます。

本日、論点の議論について、あまり時間が取れていないところで、

ご意見言いたかったけど言えなかったというところがいろいろあるかと思います。申し訳ありません。

ある程度期間をとって、皆様方からそれぞれ論点、論点にない事項でも構わないので、ざっくばらんにいろいろ思っていることを、伝えていただければありがたいというふうに思っておりまして、それを基に、第3回以降の会議の資料を作っていくたいと考えているところでございます。以上です。

座長

ありがとうございました。

スケジュールに関しまして、また今後のご意見の部分に関しましてご質問よろしいでしょうか。ぜひご協力のほどお願いしたいと思います。

特に質問・ご意見等ないようですので、本日の議事は以上としまして、進行を事務局のほうにお返ししたいと思います。

ありがとうございました。

事務局

長時間にわたり、誠にありがとうございました。

本日のご意見を踏まえ、今後の会議等を進めたいと思います。

議事録は北九州市のホームページで掲載する予定ですが、もし本日の会議の発言で修正が必要な点があれば、2月6日（木）までに事務局までご連絡ください。

議事録全体の確認は今村座長にお願いいたします。

最後になりますが、本日ご発言できなかったご意見等があれば、2月17日（月）までに、電子メールかお手元の「意見聴取票」にご記入のうえ、FAXいただければと思います。

それでは、これをもちまして、「第2回北九州市不登校等に対する総合的な検討に関する有識者会議」を閉会いたします。

本日は、どうもありがとうございました。